

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

フィレンツェ滞在手記

* 楽しみとしての語学留学 ③ *

濱 恵介

今回は、国内旅行の思い出とイタリアの歴史・文化に関する個人的な理解について内容を整理し、私のイタリア滞在報告を終えることにします。

■イタリア国内旅行

トスカーナ州内の主な都市は日帰りで訪れました。基本的に鉄道を利用し、列車の便が悪い場合はバスや車を利用します。ローカル列車 Treno Regionale は便利で料金も安いのですが、鉄道利用には気になる点が多々あったことも事実です。

イタリアの鉄道は元々国有鉄道で、今も FS (Ferrovie dello Stato) の通称は残っています。民営化でできた Trenitalia は、昔の国鉄気質が抜けないのか、非効率やサービス精神に欠けると思う場面が見受けられました。大きな駅の窓口で切符を買うには、まず番号札を取り時間がかかることを覚悟して順番を待ちます。一般的には自動券売機の方が空いています。

車両の座席は大きく、乗客に比べ十分な数がありました。それに対し窓ガラスは汚れたままなのが普通で、せっかくの風景が台無しです。夏になり室内がひどく暑いのに、エアコンが機能しない場合もありました。但し、駅や車内のアナウンスが殆どないのは静かで好ましいと感じました。

列車の遅れはよくあることで、お詫びの言葉も事情の説明もまずありません。発車・到着の電光掲示板にも Ritardo (遅延) の表示欄が準備されているのには「なるほど」と納得しました。

座席指定の場合、列車到着まで自分の乗る車両がどの辺に停車するのか分からない場合があって困りました。列車に乗り込む際、車両の床は

プラットフォームよりかなり高い位置にあるので、脚が弱くなったら難儀なことでしょう。

トスカーナ州内で訪れた都市を方面別に列挙すれば、プラート、ピストイア、ルッカ、ピサ、シエナ、サン・ジミニャーノ、アレッツォ及びコルトーナです。いずれも歴史的な建築物が広場や街路と織りなす景観が素晴らしいです。

特に若い時に訪れたシエナのカンポ広場では、また来ることができた感動で涙が出そうになるほどでした。また建築・都市デザインの雑誌に載せた当時の写真を見ながら撮影ポイントを見つけ、40 数年前まさにそこに立ってシャッターを切ったことが確認できて嬉しくなりました。一方、主要な建築は当時の古色蒼然とした趣を失い、修復され綺麗になっています。その若返った建築ファサードと懐かしく対面する旅人は既に老境に入った自分であることに、しみじみとした感情を抑えきれませんでした。建築は永く人生は短いのです。

休校の 1 週間、週末の一つ、そして帰国までの期間には、それぞれ 6 泊、2 泊、8 泊の国内旅行をしました。訪れた都市は順に、メルカテッローウルビーノ→ラヴェンナ、ミラノ、ペルージア→ボローニャ→フェッラーラ→パードヴァ→ヴェネツィア→ヴェローナそして小さなシルミオーネです。いずれも歴史のある素晴らしい都市で、大部分は 2 度目の訪問ながら、景観の美しさに改めて心打たれたことは言うまでもありません。

著名な都市の個々の印象は省略し、一般には知られていない Mercatello sul Metauro をご紹介します。マルケ州北西部にあるこの小都市を訪れ

たのは、ここに立派な住居を構え 1 年の半分近くをイタリアで暮らす日本人建築家とのご縁によるものでした。今は人口わずか 1500 人足らずですが、博物館を持ち町の中心部には立派な広場と文化センターがあります。市壁に残る城門を出ると、道はローマ時代に架けられたアーチの石橋につながり、往時の繁栄が偲べれます。



【メルカテッロの中心、ガリバルディ広場】

観光地として有名な都市と異なり、そこには飾らない普通のイタリアの生活がありました。泊まったのはホテルではなく老婦人が細々と営む貸し部屋。お年寄たちは、広場に出てあるいはバーで古い友人たちと語り合い、「孤独な老人など居ないのでは」と思いました。案内所の前にはオレンジ色の旗 Bandiera Arancione が誇らしげに掲げられていました。旗は Touring Club Italiano がツーリズム・ホスピタリティ・環境性に優れた小さな自治体を認定したシンボルとのこと。昔の水車小屋の導水路を再整備し、小水力発電にも取り組むなど、頼もしい自治体運営を垣間見ました。

一方、フィレンツェを始め有名な都市で驚いたのは、広場などの名所が観光客で溢れていることでした。特に多いのはアメリカ人と中国人。日本人は目立たず逆にほっとしたくらいです。観光客相手の物売りや客引きがうるさい程で、40 数年前と全く状況が違います。

観光地では外国人と見るや、店員や担当職員はほぼ自動的に英語で対応してきます。こちらは本場の雰囲気浸りに浸りたくイタリア語で話したいのに、この点は少々がっかりでした。「イタリア語で話してもいいかな？」と断ってようやくイタリア語での対話が始まるのです。日本でも外国人観光客だからと言っていきなり英語で話しかけるのは失礼ではないかと思いました。

■私のイタリア理解

イタリアの歴史について認識を改めたことがいくつかありました。その第一が、第二次世界大戦の終結に対する歴史観です。日本にとって終戦は、国民一丸となって戦ったけれど国土は焦土と化し降伏した敗戦であり、歴史上初めての占領という屈辱的な 7 年の始まりだった訳ですが、一方イタリアでは終戦を解放記念日 Anniversario della Liberazione として犠牲者を偲びつつ平和と自由を喜び祝うのです。それは 1945 年 4 月 25 日にナチス・ドイツによる占領状態から連合軍(アメリカ軍)とパルチザンによって「解放」された日です。対比させれば、日本では「お国に殉じた戦没者を悼む」のに対し、イタリアでは「圧政からの解放を祝う」となり、アメリカ軍は日本にとっての占領者、イタリアの解放者と逆の見方になります。私の理解は「枢軸側の日独伊 3 国の中で連合国に最初に降伏した国」という程度でしたから、認識不足を恥じた次第です。天皇制を維持(占領軍もうまく利用)した日本と、国民投票によって王政を廃し共和制を選んだイタリアの対比も象徴的です。

解放記念日の当日、たまたま居合わせたシエナでは祝賀行事が賑やかに催されていました。70 周年の特別なイベントだったのかもしれませんが。目抜き通りを式典会場のカンポ広場へ向け諸団体が旗を掲げ歌いながらパレードします。楽隊が演奏するのは、何と学生時代に耳なじんだ「さらば恋人よ」(戦いに出るパルチザン兵の別れの歌)ではありませんか。まさにパルチザンが圧政に勝利したのを祝う雰囲気でした。後日この曲がイタリア生まれの歌 Bella Ciao であることを知りました。

二番目は、今日のイタリアの領土のかなりの部分がフランス、スペイン、ドイツ(神聖ローマ帝国)、オーストリアなど周辺の強国の支配下に置かれたことです。力ある国が弱い国を攻め収奪・支配するのは、残酷にも歴史上いく度となく繰り返されました。その悲惨さや苦難とは裏腹に、文化の伝播と相互作用が起きたのも事実です。

統一された国民国家としてのイタリア建国は 1861 年のこと。日本と同じように遅れて帝国主義的な覇権争いに参加し破れたイタリアは、戦後の復興に取り組みます。日本がより華々しい経済発展を遂げたのに対し、人間中心の美しい都市を作るという点では、前提条件の違いこそあれ、イタリ

アの方が優れた実績を残したようです。

今日のイタリアは、移民・難民の受け入れ、若者の失業、外国資本による企業買収、貧富の差、危機的な国家財政など、他の先進国にも増して多くの問題を抱えています。しかしそれらを考慮しても有り余るイタリアの魅力は何でしょうか。



【ヴェローナ、シニョーリ広場（筆者スケッチ）】

■うまし国イタリア万歳

近年、「若い世代の海外へ出かける意欲が昔ほど強くない」と聞きます。日本が豊かになり居心地がよく、情報化によって外国事情も居ながらにして分かるためかも知れません。しかし現地に身を置いてこそ経験できること、また直接顔を会わさなければ理解できないことは限りなくあります。

意思疎通に不可欠な言語としては、英語が世界語の地位を占めつつあることは事実でしょう。世界の中でイタリア語の重要度は決して高いものではありません。しかし、英語の語彙を豊かにしているのは、フランス語経由を含めイタリア語のお陰ですし、ヨーロッパ主要言語の大きな源流であるラテン語に最も近いのはイタリア語でしょう。若い人たちには、英語の習得に加えて最低もう一つの外国語を学ぶことで、英米一辺倒にならない文化受容力を持って欲しいと思います。

2015年7月、財政危機からギリシャのEU離脱が議論された時、イタリアのレンツィ首相が「ギリシャ抜きヨーロッパ文化は考えられない」と発

言し離脱の選択肢に反対しました。その本心は「イタリア抜きのEUそしてヨーロッパ文化はあり得ない」だったのでは、と思われました。これは今回の滞在で、私が強く感じたことでもあります。

歴史を遡れば、イタリアはエトルリア・古代ローマ時代から中世とルネサンス期を経て近代・現代に至るまで、絶えることなく文化の主要な担い手であり続けました。その間、十字軍遠征の副産物としてイスラム文化がイタリアに伝わったことが重要です。その先進的な科学知識とともに古代ギリシャの文献がもたらされ、古代文化の再発見がイタリアにおける「文芸復興」を導いたと言われます。この成果はアルプスを越えて他の国々へも伝わり、かつ相互に影響を及ぼしながら、イタリア・ルネサンスを起点とする近代ヨーロッパ文化の共通基盤が形作られたのです。

イタリアは圧倒的な質と量の歴史・文化遺産を維持し、地域ごとの伝統を守り、多様な文化と民族を受け入れています。歴史遺産を見るだけでもイタリアは世界の宝です。さらには、創造力に富み寛容で逞しい気質でこの豊かな文化を作り上げたイタリア民族に称賛を送りたいと思います。

■むすび

私の「イタリア語学留学」は、言語のみならずこの国の奥深い歴史・文化や国情について学ぶことでもあり、同時に雑事から解放された楽しい時間を過ごすことでした。事故に遭わず体調は良好で、季節は良く生活環境にも恵まれ、申し分ないイタリア滞在となりました。

また様々な出会いがありました。特に家主のAnnaさん、イタリア語の先生Ilariaさん、学校スタッフの磯部さんと野崎さん、そして建築家の井口さんには大変お世話になり、感謝しています。

最後に、当地で知ったレオナルド・ダ・ヴィンチの名言の一つを紹介します。“Il più nobile piacere è la gioia del comprendere.” 最も高貴な楽しみは理解することの喜びである。まさに歳を取っても学び続けるのは生きる喜びです。振り返ればこれを実践しつつ過ごしたイタリア滞在 89 日でした。その最後の日を迎え、一抹の名残惜しさと深い満足感と共にフィレンツェを後にしました。

（個人維持会員、エコ住宅研究家）

ローマ滞在日記⑤

* サッカーの国で野球を *

二宮 大輔

私がイタリアの野球に関する考察を始めたのは、遡ること六年前のローマ留学時代だ。

「日本人は野球が上手いんだろ？今度いっしょにやらないか？」ある日、イタリア人の友人にそう誘われた。彼が所属するローマの野球チーム「ローマンズ・カヴァリエーレ・ベースボール・クラブ」で紅白戦があるというので、「助っ人外国人」として私にもお声がかかったのだ。

当時はまだイタリア人が野球をするということを知らなかったの、興味を持って事情を聞いてみると、野球連盟に登録しているチームが全国に450もあり、その頂点8チームはプロとしてリーグ戦を行っているとのことだった。野球が普及した大きな要因は、第二次大戦後、各地にできた米軍基地だ。米国で野球を学んだイタリア人移民の二世、三世が、イタリアに戻って活躍することもある。一番の強豪はローマから南東60キロにある港町ネットウーノ。プロリーグの初代チャンピオンで、国内最大の球場も擁している。聞けば聞くほどイタリア人の行う野球を見てみたいとの好奇心が高まり、私は意を決して紅白戦に参加した。

翌週日曜の朝、郊外のグラウンドで試合が始まった。中には上手な選手もいるが、日常生活で野球を見慣れている日本人からすると、彼らの投球や打撃のフォームは、どこかぎこちない。すると、すかさずベンチからどなり声が聞こえてくる。声の主はサングラスをかけた老監督。強面で、何かにつけて大声でわめき散らしている。きっと現役時代は名だたる選手だったに違いない。こちらまで怒られるのではないかとハラハラしたが、そうこうしているうちに試合終了。事なきを得た。

自分の成績や試合結果は覚えていないが、帰りがけの車中で衝撃の事実を知らされたのははっきり覚えている。後部座席で私が胸をなでおろしていると、友人がああ鬼監督について教えてくれた。名前はグイド・オッチデンテ。なんと彼は元サッカー選手で、野球選手としての経験は皆無ら

しい。野球好きの息子のために、にわか勉強し、いきなり監督になったというのだ。イタリアでは野球がマイナーな種目にすぎないと痛感させられた瞬間だった。競技人口は5万人程度。スポーツ用品店でも道具が揃わず、本格的に野球をするなら、一式、海外からオーダーせざるを得ない。

自分は慣れ親しんでいるのに、この国ではマイナー種目。そんな野球を行うイタリア人に大きなシンパシーを感じ、その後も折りに触れ、友人たちと草野球を楽しんだ。この野球経験が買われてか、昨年の夏、野球のイタリア代表チームの通訳をするという機会に恵まれた。2015年の8月、ちょうど高校野球が終わったころ、18歳以下の野球のワールドカップが大阪で開催されたのを覚えておられるだろうか。強打者として大きな話題を集めた清宮幸太郎や楽天イーグルスと契約した俊足オコエ瑠偉も出場した国際大会だ。その大舞台にヨーロッパ代表としてイタリアも参加していたのだ。元サッカー選手が監督を務めるチームに端を発する我が野球通訳体験。イタリアという国を考える上での貴重な材料となったので、ここでご紹介したい。



【ローマンズ・カヴァリエーレのキャッチャー】

まずこのワールドカップに参加したのは、日本、韓国、アメリカなどを含む12の国々。各国チームに、世話役となる通訳がつき、これをリエゾン（フランス語で取り次ぎ係の意）と呼ぶ。その名の通り、チームと、チームが滞在するホテルに常駐している大会本部の間を取り次ぐ役割を果たす。まずは関西国際空港にお出迎えするところから各リエゾンの仕事が始まる。チームによって到着時

刻が違うので、基本的に各リエゾンは別行動を取る。イタリアチームの到着は夜 18 時頃。17 歳、18 歳の選手が 20 人と監督、スタッフなどの大人たちが 8 人、計 30 人弱の大所帯だ。さっそく自己紹介をしたのだが、ダイスケというイタリアでは馴染みのない発音の名前を覚えてもらうことを断念し、名字のニノミヤからニノというあだ名で呼んでもらうことにする。ニノはジョバンニーノという一般的なイタリア人男性名の愛称でもあり、イタリア人に取っ付きやすいのだ。これが功を奏したのか、チームとの距離は一気に縮まる。と同時に質問に次ぐ質問の嵐。「ニノ、日本で携帯を買おうと思うんだけど」、「ニノ、両替はどこでできる」、「ニノ、スポーツ用品店に行きたい」、「京都に行きたい」、「女の子と知り合いたい」……。大量の野球道具とともに大型バスに乗り込み、そんな質問攻撃に一つ一つ応じていたら、あっという間に大阪市内のホテルに到着し、一日目は終了。翌日からは練習が始まったのだが、万事そんな調子だ。あれがない、これがない、あれが必要、これが必要。他国チームの事情をよく知らないで偏見かもしれないが、イタリア人のわがままここに極まれりという感じだ。

だが、大変なことばかりではなく、もちろんいいことも多々あった。例えばオリックス・バファローズの中継ぎ投手アレッサンドロ・マエストリに会えたこと。アメリカで経験を積んだ後、四国独立リーグに移りオリックスにスカウトされた日本初のイタリア生まれイタリア育ちのプロ野球選手だ。彼はもともと 18 歳以下のイタリア代表チームのメンバーで、コーチや監督とも旧知の仲だったのだ。チームが日本に到着した翌日、さっそく練習場所である市民球場まで遊びに来てくれた。テレビで見るユニフォーム姿の彼とは違い、Tシャツにハーフパンツ姿は、いかにもイタリア人の好青年といった感じ。コーチたちも久しぶりの再会に練習を止めて、にこやかに談笑している。「お前も一緒に写りたいだろ」と、みんなの好意で私もマエストリと記念写真をパシャリ。個人的に会いたかったイタリア人の一人にこのような形で会えて大いに満足だった。

もう一ついいことを挙げるなら、チームの引率者であるファブリツィオ・デ・ロツビオとの出会いだ。チームの最高責任者で、監督としてインタビュー

も受けるが、もともと選手ではなかったし、今も技術を選手に教えているわけではない。ワールドカップの本番が始まり、チームの負けが込んでいるのに、どこまでも明るい他のコーチや選手たちと違い、みんなと仲良くしながらも、球場の内野スタンドで黙り込み一人になることもあった。心配して様子を見に行くと、「怒っているわけじゃないけれど、負けているのにヘラヘラしているのは嫌い」と答える、ある意味繊細な人物だ。私がトリエステの作家の小説を翻訳しているところだというと、トリエステ出身だった彼は大いに喜び、連絡先を交換し、数ヶ月前にトリエステを訪れた際には、自宅に夕飯を招待してくれるほど仲良くなった。



【マエストリ選手と】

おわかりだろうか。日本に着くなり、あれがしたい、これがしたい。旧友のスター選手が来ると練習を中断して談笑。10 歳以上年齢の離れた通訳と仲良くなって、自宅に招待。どれも日本の高校

野球界からすると、起こり得難いことではないだろうか。いや、実際に体験したことはないので憶測にすぎないが、厳しい規律と上下関係を持つ日本の野球と比べると、イタリア人の野球に対するスタンスは大きく違っているように思う。

練習時にこんなこともあった。全員の集合が遅れ、朝の練習開始時間から10分遅れて球場に到着。後の予定が入っていないのを確認して、10分延長していいかと球場にお願いしたところ、球場を管理する日本人スタッフから「時間に遅れたお前たちが悪い」と一蹴された。極めつけが「ここは日本なんだから、日本のルールに従ってもらわなくちゃいかん」。食い下がって、なんとか球場横の練習グラウンドは使わせてもらえたのだが、まったくもって日本のルールはイタリア人向きではない。

また大会期間中、朝日新聞に掲載された記事も目を引いた。日本は国際的「暗黙のルール」を知らない。日本が8-0と大きくリードしたチェコ戦の五回、日本チームは追い討ちをかけるように二盗塁を決めた。大量リードをしているチームが試合終盤に盗塁をするのは国際的なマナー違反だ批判された。だが、日本ではどんなことがあろうと全力でプレーするのが相手への礼儀だと教えられている。全力でプレーすることで学べることもあるわけだし、礼儀正しく全力でプレーする日本の野球を、もっと世界に発信してもいいのではないかと記事は締めくくってある。イタリアチームの選手に記事のことを伝えると、少し考えてからこういう答えが返ってきた。今大会は七回が終わった時点で10点差がついていたらコールド勝ちというルールだから、日本チームの盗塁にも意味はある。ただ普通の試合ではそんなことしない。さて、果たして普通の試合でも日本チームは盗塁しただろうか？ともあれこれらの事柄はイタリアと日本の野球の差異を如実に伝えている。

大会の全試合が終了し、日本チームは決勝戦で惜しくもアメリカに敗れ二位。まだまだ世界のレベルとは差があるイタリアは二勝六敗で全体成績は十位だった。決勝戦直後の閉会式では惜しくも優勝を逃して悔し涙を流す日本人選手を尻目に、横に並んだイタリア人選手たちは楽しそうに雑談している。式の最中もうるさいし、そもそもしっかり

と整列などできていない。最後まで違いを感じさせてくれるイタリアチームだ。それぞれの国のスタイルがあるのは当然だし、それに優劣はつけられない。郷に入れば郷に従えというのはもったもであるが、他国から来たチームにいきなりそれを要求しても軋轢が生じるだけだろう。相互理解のもとに国際的に野球が発展することを願ってやまないし、今後もその一助になればと思う。

(元当館語学受講生)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 京都本校：日本イタリア会館
1/ 9(土) 11:00～12:30
1/11(月) 11:00～12:30

- 四条烏丸：ウイングス京都
1/ 8(金) 19:00～20:30

- 梅田：大阪駅前第4ビル
1/ 6(水) 19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向けのクラス選びのカウンセリングです。事前予約制。

- 京都本校：日本イタリア会館
1/ 9(土) 14:00～(各人約30分)

スペイン語 無料体験レッスン

- 京都本校：日本イタリア会館
1/ 9(土) 11:00～12:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>